高知工科大学におけるキャリア教育について

高知工科大学社会システム工学科教育講師　フェロー会員　伊藤綱男

1. はじめに　キャリア教育とは、中央教育審議会答申（平成11年12月）によれば、「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」であり、これらを通じて社会と大学との円滑な接続が期待されている。また政府の若者自立・挑戦プラン（平成15年6月）においても、キャリア教育の重要性がうたわれている。さらには、社会人基礎力に関する研究会（平成18年1月中間とりまとめ）では、社会人基礎力をつけるための方策として大学など教育機関での必要な取組みが求められている。土木学会の教育企画・人材育成委員会では，土木技術者の生涯教育に関するグランドデザインの検討や人材育成の面から大学教育と理想的な土木技術者のたどるキャリアパスの点について検討が行われている。本論では、高知工科大学社会システム工学科におけるキャリア教育の実施状況を示すとともに今後の課題等を報告する。

2. 全学でのキャリア教育の実施体制と内容

全学的取り組み　本学の目指す教育目標は、自ら問題を見い出し、考え、行動し、解決していける、“真の人間力”を持つ実践的技術者の育成である。進路選択に当たっては、本人の能力と適性を見極めいかに適切に行うかが課題である。一方、私立大学において就職状況は、受験生が大学を選ぶ選択肢の一つであり、就職率の維持は経営上からも重要視されている。このため、全学的な取組みとして就職センター及び就職支援部が設置されており、学科においても就職担当教員が配置されている。大学での就職支援では、究極的には進路選択の相談であり、内定獲得までが直接の目標となる。本学での就職支援の戦略としては、就職の質をいかに高めるかであり、企業との関係強化とともに、人材育成と適材マッチングをより細やかに実施することである。

年次別取組み　本学では入学直後から、様々なプログラムでキャリア教育を実施している。1年次では、進路ガイダンス（年間2回：大学生活と将来の進路、仕事を考える）及び導入教育としてスタディスキルズ（2単位）を実施している。スタディスキルズは、少人数（13人程度）で大学での基礎学力スキルの向上とともに意欲的に大学生活を送る、自立生活、人間力をつける、将来の目標を考えるなどシラバスにうたっており、キャリア教育の一環として位置づけられている。2年次では、全4回の自己理解プログラム、全5回の社会人学シリーズを実施している。3年次では、キャリアプラン1（1単位）として全12回開講し、自己分析、エントリーシート、志望する進路など課題を提出させ添削を実施している。主に外部講師（進路に関するコンサルタント）が担当している。これらの講義は全学対象としており、意識付け、進路選択に当たっての基本的な事項が主となっている。就職支援部からの発行物として、就職ハンドブックと就職データブックが全員に配布されている。なお3年次では、夏休み中に2週間の「インターンシップ」を実施し、その参加者は417人、参加率は西日本で最高の実績を残している。関連の講義として、全学を対象に「世界一を目指せ（7人の気魄）」（わが国の企業トップが学生に語りかける講義）がある。学生にとって大きな刺激となっている。2006年3月末での全学での就職内定率は、学部生で98.9%、院生で100%であった。なお就職率は以下の式によっている。内定率＝内定者数／就職希望・卒業見込み　　なお、就職希望・卒業見込み＝卒業者数ー（進学者＋就職支援を必要としない者＋卒業見込みが出せない者）

3. 社会システム工学科におけるキャリア教育の内容

インターンシップ　3年の夏休みに2週間実施している。多くの事業所に受け入れ頂いている。高知県庁、高知市役所、ゼネコンの現場事務所、建設コンサルタント会社、建築設計事務所などである。本学科の場合86名（参加率89.5%）である。教員全員が学生の担当となっている。

キャリアプラン2　学科独自のカリキュラムとして、3年生を対象（96名）に年間を通じて全25回開講し

ている。表－1に実施内容を示す。就職担当及び学年担任の3名の教員で実施している。進路に対する意識づけ、意思確認、業界・業種の解説、志望動機など自己紹介書の確認、添削などである。とくに就職困難学生に対しては、連絡・呼び出しによりこまめな対応を心がけている。プログラムの中でとくに重要視するのは、面談である。挨拶、話し方などの基本的態度に加えて本質的な問答をおこなっている。希望する職種、その理由、今まで大学で何を学んできたか、具体的に何を身につけてきたのか、それをどのように生かして生きたいのか、最終的な使命はなにか、これからの人生の生き方などを問うこととしている。

面談は4次にわたる。4月では、進路に関しての希望（業種、ゼネコンか建設コンサルタントか、設計事務所かなど）、12月では大学院進学か就職か、就職する場合の業種の方向性や個別会社選択相談、2月では就職活動への対応性、困難性などを判断し指導している。3月では就職活動に入った段階での個別対応となっている。6月、7月には、外部講師による講演を全7回実施した。ゼネコン、建設コンサルタント、建築設計事務所及び国土交通省である。業界動向、仕事の内容、新卒者への期待、入社試験の心得など直接話を聞くことにより進路を考えるきっかけや、インターンシップ先の選定にも役に立つよう配慮している。また内定取得者からの就職活動体験や卒業生からの職場での実際などを話しもらう機会を持った。会社の人事担当者に来ていただき、模擬面接を実施した。

表1　06年度学科キャリアプラン2　プログラム

4月　第1次面談
5月　SPI模擬試験、志望動機と自己ＰＲ、インターンシップ関連
6月、7月　外部講師による講演（全7回）
8，9月　2週間のインターンシップ
10月　進路相談カード、企業研究、先輩による就職活動体験講演
11月　進路意向調査、SPI模擬試験
12月　第2次面談、エントリーシートの書き方、面接の受け方
1月　SPI模擬試験、模擬面接
2月　就職活動出陣式、第3次面談
3月　第4次面談、個別面談

授業では、進路先研究、会社研究、エントリーシートの書き方など説明し、同時に各種のレポート提出させている。出席率は、約60％程度である。全学と学科での講義をあわせると3年生対象とした就職支援の授業は年間最低で37回の機会が準備されている。就職活動中の4年生・院生に対しては、定期的に面談を行うとともに、希望者に対しては、受験直前での面接練習など随時、実施している。

4. 社会システム工学科における指導結果

学科では、研究室の教員が第一義的な責任を有している。就職担当はその支援を行う役割、求人会社人事担当者との接触、就職支援部との調整連絡、面談、個人相談などである。昨年度の就職結果では、就職希望者56名のうち就職率は96.5%となった。就職先としては建設系・技術系の分野（ゼネコン、建設コンサルタント、ハウスメーカー、情報処理、製造業等）が75%、それ以外の公務員、金融業、小売業、自動車販売等が約25%となっている。また勤務地では本学科の場合、地元希望が多く、高知県内が約25%となっている。9月までに内定を獲得した学生の割合は、73%であり順調な内定となった。9月までに内定が決まらないとかなりあせりを生じてくる。彼らに共通するものとしては、①自分が何に向いているかどうか分からない②勤務地へのこだわり（高知県内企業）③業種へのこだわり（特定の業種分野）④過信　⑤基礎能力不足、コミュニケーション力不足などが見受けられる。

5. 今後のあり方と課題　今後の方向として、よりよいキャリア形成支援として、本人の適性、能力、希望と如何にマッチングした職種へ導くことができるかどうかが課題である。本人の進路・就職に対する意識づけ、目標づくり、情報提供のあり方、社会に出る事への不安の解消などがあげられる。また就職困難学生への対応も課題である。キャリア教育は、学生から社会人への脱皮過程であり、技術者の前に一人間としてのあるべき姿、基盤形成に大きな役割を有している。このため、年間プログラムの体系化、個別対応、ノウハウの蓄積により、今後予想される学生の多様化へ対応していく必要がある。